
ONE PIECE 手違いの転生者

8in13

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 手違いの転生者

【Nコード】

N6317Q

【作者名】

8in13

【あらすじ】

とある転生者が神様の手違いで記憶消し忘れたから消させてくれと頼まれる。転んでもただでは起きないぞつと転生者は悪魔の実を要求。しかし神様は悪魔と関わりたくないから代わりの実を作つてやるからそれで我慢しろという。やがて転生者は神の実（仮）の力で海賊となり、海を旅する。

素人が勢いで書いた話。処女作

転生しました！

俺は転生した

何を言ってるかわからねーと思（ry

その日、俺は起きてまず泣いた。なぜかは知らんが息しづらく辛くて泣いてしまった

「おぎゃーおぎゃー」

「”@%ゝ、！」

「%#&？」

「\$’！#&%〃」

え？何？なにいつてんの？てかここどこだ。などと戸惑っていたがすぐに思い出す

ああ…俺、死んだんだ。勉強も運動もロクにせず、家でずっと漫画やアニメを見てたせいで会社に入らず、フリーターをしていたが、結局工場で落ち着いた。

それもつかの間、ヘマして指を切断。その後も諦めずハロワ通いでなんとか仕事を見つけたが初出勤から遅れて、急いでたらトラックに撥ねられ即死。

なんか悲しくなってきた・・・まあそれは一旦おいといて、ここはどこだ？

男の人と女の人と医者っぽい人がが喋ってる。言葉は英語に似てるけど何語だろ。フランス語？イギリス語？

そして気づく、体が動かない。体を見ると赤ちゃんになっているとわかった

なるほど、これが所謂転生^{いわゆる}って奴か、と思いつつ眠りに落ちる。

そのあと数日ひたすらキヨロキヨロ…もとい情報収集の結果。

俺は異世界に転生したと結論を出した。

結論付けた理由ははこの親父が呼んでた新聞に挟まってたビラ

が見えたからだ。

大きな顔写真の左下にβに似た字が書いてあり、βの隣には数字と
いっぱい0が並んでいた。

前世ではワンピースは大好きな作品だったから、懸賞金のビラだと
すぐにわかった。

だからその時は冗談半分で「ワンピースの世界だったらいいなあ、
転生者だしオリ主になって原作介入してハンコック娶ったり…グヘ
へ」とか妄想してた。まさか本当にそうになると知らずに

それから3、4年、俺は前世で痛い目にあった経験を生かし、赤ん
坊の頃からさりげなく筋トレしたりと必死に努力した。

周りからはガキらしくないガキとか言われながらも、毎日基礎体力
を作りつつ体を鍛え、字や言葉の勉強を続けた。おかげで友達は皆
無である

そして確信したことが幾つかある。

・ここはワンピースの世界、もしくはそれにとても似た世界。

・俺が生まれたのはロジャーが処刑された日らしい。

・ここは東の海^{イーストブルー}

・ここは海よりも森が近いベリン村っていう所

・俺の名前は「サイラックス・G・セルリック」

・ちなみに東の海^{イーストブルー}って確信したのはフーシャ村を確認したからだ。

はじめは二次創作のオリ主みたいになってやるぜーなどと息巻いき、
喜んでいた。

しかし現実は一蹴、これといった才能はなく、悪魔の実を拾えず、
生まれつき特殊な能力があった訳でもなかった。

だけど、努力の甲斐あって島一番の神童と呼ばれるまで至った。

「そっいえば神と名乗るところかそれっぽい奴にすら会った記憶す
らないなあ」

ある日、その重大な見落としに気づき、落ち込んでいたら、親父に
呼ばれた

「おいセルリック！面白いもん拾ったぞ！」

「なんだよクソおやじ」

「なんだ、テンション低いな。ほれ、こいつは今日からお前の妹だ」

「は？ってこいつダルマじゃねーか！」

「ダルマ？手足がないからかわいそうだと思ってるな」

「そ、そうか。ちなみにどこで拾ったんだ？」

「ん？不確かな物の終着駅グレイターミナルで使えるもの探してた時に貴族様の部下が捨てたのを見てな、ありがたく頂戴したわけよ。お前友達いないから大事にしるよ。ガッハツハ」

「余計なお世話だ！で、誰が育てるんだ？」

「と、ところでセルリック、聞いたぞお前、カルザックに将来有望って言われたってな」

前世の記憶のおかげで覇気の内容を知ってたから、研究してた。

そしてこの前、狩人のカルザックおじさんに付いて行った時に試してみたら、

見聞色と武装色が申し訳程度にできたのを見られて、褒められたのだ

「おうよ！こちとら天才様だぞ」

そういえばカルザックのおじさんなんでわかったんだ？まあいいけど

「じゃあその天才様にこの子の世話を頼むとするか」

「ハアアアアア？」

なんで未来のオリ主様がこんな事しないといけないんだ。

才能はなくても悪魔の実の才能ならワンチャンスある。だからいつか自然系の悪魔の実を食べてオリ主になるんだ。ロギア

とか心のなかで悪態を付きつつも、体の欠陥による不便さを知ってる俺は育てるのを積極的に手伝うことにした。べ、別に寂しかったわけじゃないんだからね！

幸い、食料調達するだけで済まされた。親父は当然オカンに怒られた親父が拾ってきた日に近所に子供を産んだ人がいた時は義妹の運よすぎだろと思った。

捨てられたと思ったら拾われて、しかも母乳を代わりにあげる人がいて。まあどれもこれも優しいお兄様がいてあげたおかげかな？！ちなみに子供を生んだおばさんはなかなか了承してくれなかったけど「だるまでも大事な妹なんだよぉ」って嘔泣きしたら

余った分を飲ませてくれるって言ってくれた。こき使われたけど。

その事を親父に話したらいい経験だとかほざき始めた。

ム力ついたから股間蹴り上げてやった。ざまあみる

…さすがに痛みが分かるだけに手加減したけど

そして俺が7、8歳の時、神様が現れた。夢に

転生しました！（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

神の要件 i n 夢（前書き）

義妹の名前はサヤにします、主人公が名付けたという設定です。
前の話で書かなくてすみません。

神の要件 in 夢

「お兄ちゃん…私、なんでみんなと違うの？」

「サヤ…」

何かを言わないとは思うが、何も思いつかない。そんな時

「やあ、セルリックくん。」

「誰だお前、それよりサヤはどこ行った！」

突然、サヤの姿が消えた。その代わり、その場所には若い男が立っていた

「そう慌てないで、ここは夢だよ。第一、君の大事な妹ちゃんはまだ3歳になったばかりだろ？あと、僕は神様だよ。要件を言いに来た」

「か、神？」

ああ、たしかにさっきの女の子は6、7歳にみえたな。ん？さてよ神様が来た！チート能力授ける、ウハ、キタコレ的なことを1秒未満で考え、しゃべり出す

「神さ「君に力を与えないよ」え」

どういう事だ？

「つまりね、君を転生させた時に記憶を消し忘れたせいで責任とらされたのよ。だから今日は記憶を消しに来た。力を授けないのは直接手を出せないのもあるけど」

え、つまり

「俺がオリ主とかそんなのなの？」

「うん、ない。だいたい、娯楽のために適当な奴に力与えてパラレルワールドをつくるぐらいなら他の世界見たほうが楽だろ？」

「そ、そんな…」

「話がそれちゃったね、僕の要件は君の記憶を消しに来た。でもそれは僕の手違いで起きたことだから僕としては悪いことしたと思ってる。できることなら貸し借りはなしにしておきたい」

「じゃあ義妹の手足を直してください」

「さつきも言ったように悪いけど直接生き物に手を出すのは許されてないんだよ」

生物は無理ってことは…

「生物じゃなければ大丈夫ってことですか？」

「まあそうだね」

じゃあ悪魔の実なら…

「言つとくけど悪魔の実を僕がどうにかして君のところに贈ることは不可能だよ。どうやら悪魔の実を作った人は僕より強いみたいだから手を出せないのよ。だから手に入れられるかどは完全に運」

そ、そんな・・・

「あ、でも似たような物なら作れるよ」

「なんだって?! お、お願いします! サヤを助けてやってください!」

「作って送り届けるだけだよ、助けるわけではない。まあこれで貸し借りはなしだよ。起きたら海辺に行けばヘンテコな実が入った宝箱が落ちてるはずだから」

「でも、記憶は消されるんじゃない」

「海辺に行けば妹の身体障害をどうにか出来る悪魔の実を拾えるってなんとなく思うように仕向けるから」

「あ、ありがとうございます」

「じゃ、楽しみにしててね」

「はい!」

神の要件 in 夢（後書き）

続きます

番外編：会話後の神様（前書き）

これと前の話しで神様関連は終わりの予定です

番外編：会話後の神様

セルリックが消えたあと

「とりあえず僕の力で作れる実を全部だそう」

と神が独り言を言うのと、神の周りに沢山の果物が出てきた普通の果物から腐った果物までありとあらゆる果物だ

「とりあえず能力を授ける果物以外を消して。うん、結構減ったね。」

残った果物は皆金色やらおかしい渦模様があったりと怪しいものばかり

「この中でバランスを壊さない程度の物で使えそうなのは…これだけかな」

そう言って10個に満たないの実を自分の前に置く。

「食べるとスライムになる実、”なれる”じゃなくて”なる”だから却下」

「動物系みたいになれるクモバージョンシリーズ、毒がなくて強そうなたランチュラを保留」

「自然系ロギアに似た植物系の実、これで動きを補佐すれば動けそうだけど訓練しないといけないから保留」

と言う感じの事をしばらくやったあと、結論を出す

「やっぱりこの中で一番よさそうなのはタランチュラの実かなあ。食ってちよつと練習すればどうにか動けそうだし。」

でも制御の方法わからないとクモのまんまなんだよなあ。

アドバイスの紙を入れても人形になるのは時間かかるだろうなあ…まあいれるけど。

そういえばあの転生者は自然系ロギアの悪魔の実がほしいとか言ってたな、ちよつどいいから植物人間になれる

やつサービスでいれとこ。クモになって村の奴らに殺されたらやつた意味なくなるし、守ってもらうためにも力を付けてもらわないと。

うん」

そして神様は2つの実と手紙を宝箱に入れ、宝箱に手をかざした後、やり遂げた顔で宝箱を海に流した。

番外編：会話後の神様（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

悪魔の実？（前書き）

ちよつと書き方変えてみました

悪魔の実？

この日、少年…もといセルリックはいつもより早く起きた

「うーん。外まだ暗いなあ、よし！今日はちよつと遠目に海辺まで走るか」

海辺にしたのは、昨日の夢のせいなのだが、本人は当然気づいていない。どうやら記憶はもうすでに消されたらしい

- - - - - 海辺 - - - - -

海辺には2人の男が歩いていた

「おい、いつまで歩くんだよ。さつさと村さがすか食料調達しないと怒られるぜ」

「黙って付いて来いよ、俺のカンはよく当たるんだよ。今度だってタコぐらい拾えるだろ」

「でもお前この前当たらなかったじゃねーかよ」

「チツ…あと5分、5分だけだ。」

「わかったよ。見つかなかつたら果物拾いにいくぞ」

「へいへい」

- - - - - 2、3分後 - - - - -

「お、おい！お前今回は大当たりだぜ！宝箱が落ちてるぞ」

「おお！ほんとだ！と言ってもこんなところにあるなんてどうせ中身は空なんだろう」

「テンション下がる事言つなよ…とりあえず見に行こうぜ」

会話を終えた二人は宝箱に駆け寄る

「っ、かてえ」

「なんだと、俺にやらせてみる。ふん！ほんとだな」

「切ってみるか？」

「中身傷ついたらどうする。でもこれは期待できそうだな、ちょっと船長に報告して力ある奴読んでこよう」

「そうするか。この硬さなら他のやつに見つかっても大丈夫そうだし」

結論をだした二人は、きた道を走りながら帰っていった。

二人が去ってしばらくして、少年が森から抜けてきた

「ふいー、とうちゃく。ん？なんだあれ」

少年は一息ついたあと、宝箱に気づく。そして駆け寄り、手にかける

「よいしょっと。あれ、この蓋ふたずいぶん軽いな、どれどれ」

「お！実が2つと紙が入ってるな！それにしても変な実だなあ。あれ、この紙字が書いてあるな」

この箱を開けた者へ

この箱に入ってる二つの実は悪魔の実である

「まじかよ、これ売れば最低でも2億ベリーかあ」

緑色は植物を作れる実で、もう一つは手足のない者でも歩ける様になる実である

「手足が無い者ってやけにピンポイントだなあ。あ！でもサヤに使えるかも」

しかし、植物を創りだすと、それは体の一部とされるから、取るときは痛みがある

しかし、手足の代わりができて、制御を終えるまではクモであり、制御ができてそれはクモの手足となる。

「悪魔の実海とか水全般ダメ以外にも代償があるんだな」

裏にヒントを書いておいた。願わくば、拾った者とその妹に食べてほしい。

「次は裏か」

植物を操る者は、種で植物を作れば痛みとならない。重要なのは正確に植物の形と効用を思い浮かべること。熟練すれば、新たな植物を作れる

「これでおやじに教えられた薬草作れるな。しかしこれは何系なんだろう」

クモとなる者は、己の心にクモがいると考えるべし。解き放てば、体はクモに。拘束すれば、一部がクモとなる。また、閉じ込めれば、元に戻るだろう。できるだけ人に見られないようにすべし

「これは動物系ソオンかな。制御覚えるまで見られないようにしたほうがいいのか」

最後に、書いてある事が全てではない。自分で使い方を考えるべし。「？つまり書いてある事以外の能力もあるってことか？それにして

もおかしいな、まるで俺当ての宝箱だな」

少年が考え込んでいると、数人の男が近づいてきた

「おい！そのガキ！どうやってその宝箱を開けた！」

「え？普通に開けたけど…」

「まあそれはいい！何が入ってた！」

「変な実が二つ…」

そこで、少年は突然思い出した。これは悪魔の実で、悪魔の実が高く売れると

「おい、悪魔の実かもしれないぞ」

「それよりあんなガキでも開けられたのになんで俺を連れてきた」

「いや、俺らではあかなかったんですって」

「なに？つまりあのガキはそんだけ力あるってことか！油断するなよ」

そこまで話したところで、少年は二つの実を両手に抱え、紙を加えて森の中に走りこんだ

「おい！待てこのクソガキ！」

「ちょうどいい、あいつが村に案内してくれる。ついでに悪魔の実もかっぱらおう」

すぐに相談を終えて、数人の男は少年の後を追いはじめる

- - - - -森の中で- - - - -

「ハッハッハッ、クシヨ、しちゅこい！」

「こ、このガキィ…！ どんだけ体力あるんだよ…」

「こちとら毎日走り込んでるんでね！」

そうは言ってるが、両手に重たい実をもち、紙をくわえているため、体力の消費は激しい。」

「お、あそこは」

少年は小屋を見つけると、すぐに小屋の前まで走っていき、門をたたく！

「カルザックさん！ 助けてください！ 変な人に追われてるんです！」

どた！と落ちる音がしてすぐ、ドアが開く

「何い？！ なんて厄介事を持ち込みやがる！ 早く入れ、俺がどうかする」

「は、はい！」

「ハアハア、クソ、そこのおっさん、ハア、しにたくなけりやハア、そこをどけ！ ハアハア」

「ハアハアどうしたんだい？ 盛の付いた犬じゃあるまいし。クク」

「バカにしてんのか！ハアハア、ぶつころしてやるハア」

なんとか息を整えつつ、一人が剣を抜く。他の数人はニヤニヤ笑いながら見てる。どうやら見物するらしい。

「おお、やる気かい？ちよつと待ってね」

そう言つて、カルザツクは家に戻り、もふもふした手袋に指の先に刀がついている物を手に付けて戻ってきた

「じゃあ、始めようか。いくら鈍つてもお前らごとときには負けないだろ」

「野郎…ナメやがつて！」

物騒な手袋を見て、少し怖気突きながらも、剣を抜いた奴がカルザツクに向かつて走り始める。対するカルザツクはゆっくり歩きながら、近づいていく。

「死ねえ！」

と雄たけびをあげながら斬りかかるが、カルザツクは体を傾けて避ける。そして相手が剣を底から切り上げるより先に、胸に手袋を刺し、下に引く。

「ぎゃああ…あ…」

ドスン

その瞬間、笑つて見てた男達の顔が凍った

その隙を見逃さず、間合いまで走り、一人の顔を割く。そいつが顔を抑えうずくまったのに気づき、剣に手をかけた一人の剣にかけた方の手をぶった切る。そこまででやっと一人が剣を引き抜き終える。が、あまりの早業に、悲鳴が上がる

「う、うわああああ」

カルザックはそれを見てクスッと笑い、剣を吹き飛ばす。そして座り込んだ相手の胸に剣を当て、言う

「で、なんでお前らはサイラックスの坊主を追いかけたんだ？ああ、坊主ってのはさっきのガキな」

「は、はい！あのガキが俺らが先に見つけた悪魔の実が入った宝箱の中身を持って行きました！」

「ほお、悪魔の実か」

「はい！」

「で、あいつがそれを盗んできたと」

「いえ、正確には海辺にあったものです」

「では盗んだのではなく、彼から奪おうとしたのか。見逃せないな。そう言いながら、胸に手袋の刀を突き刺し、命を断つ。」

「おや？腕を切った彼は逃げたな。いやはや、カンが鈍ったな。それより、おーい！終わったぞー！」

そう小屋に叫ぶと、おそろおそろといった感じで少年セルリックが出てくる

「こいつら、全部死んじゃったの…？」

「そうだ。吐きたければ吐け」

「見ても吐けないよ。やっぱり僕はおかしいのかな」

「別に吐かなくてもいいさ。絶対吐きたくなるって物じゃないしな。」

「それにしてもおじさんの強さは狩りの時からわかってたけどまさかこんな簡単に人を殺せるなんて」

「まあな、これでも昔は海賊だったんだ」

「え、ほんと？」

「ああ、本当さ。今度話しをしてやるよ。それよりお前悪魔の実を拾ったんだってな、ちよつと見せてみる」

「え？うん。小屋においたから」

「わかった」

そこまで言つと、カルザックは小屋に入っていく、セルリックはそれに付いて行った。

悪魔の実？（後書き）

人の作品を見れば見るほど自分の作品のダメさが実感できて涙目です
ね。

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

キャラ設定など

セルリック

植物人間（文字道理植物の人間）の予定

8歳頃、神様に記憶消されるまでは転生者。原作知識を忘れないために注意すべき能力者の能力と名前を書いたノートをつくってある。体を鍛えながら字と薬草の見分け方や種類、生息地域を覚えていた。記憶を消されたあとも、体を鍛えるのが習慣になっていて、辞めていない。体を鍛えたり勉強したりと忙しく、同年代の友達を作ってないせいか、シスコン

黒い髪に黒い目、肌は茶色。髪を切るのをめんどくさがるため、髪の長さは肩まで行かない程度。筋肉達磨になりそうだったが、カルザックの指導で筋肉ダルマを免れてる

ジャック

セルリックの父親 医者

カルザックの親友で元船医。昔同じ船に載っていた。サヤを拾ってきた張本人。サヤに医学を仕込んでいる漢方の達人。戦闘能力は一般的なグランドラインの海兵とタイマンはれる程度。

軽く釣り上がった目で体は太い。筋肉もが贅肉に変わりつつ、中年体型に近づいている

カルザック

森に住む狩人

ジャックとは親友で、獣の間引きをしたり、獣の肉と野菜を交換したりして生計を立てている。猛獣が村に近づけないようにしてるのもこの人。戦闘能力は現役と比べてかなり劣るが、現役時代では俊足のカルザックと呼ばれ、賞金6000万ベリーだったが、死んだことになっている

細目で長めの髪、笑うときの口は横にでかい。体は細いように見えるがムダなく鍛え上げられている。どんなに急ぎでも早歩き程度にしか歩こうとしない

サヤ

セルリックの義妹で四肢がない。だるま

子供の頃ジャックに拾われた。基本兄が世話をして、兄がいない間はお母さんが世話する。勉強熱心（医学）で美人。ブラコン気味金髪で青目、病的なまでに白い肌。（火にあたってないため）手足がないのを抜けば西洋風美女

セルリックの母（名前未定）

セルリックが代わりに薬草を取りに行ったりする様になったので、主に教育とサヤの世話と家事をして過ごしている。最初はサヤを受け入れるのを拒否していたが、だんだんサヤが自分の娘に感じている。セルリックを産んでから子供が産めなくなったという裏設定があったりなかったり
容姿は自分で想像してください

今のところ母を抜いた4人を中心に海に出るまでの話をやる予定です。予定が変わったり、書き方を変えたりするかもしれませんが、よろしく願います。

如来神掌とかよくわからないので勝手に決めました

1〜8の型があり、”8式の掌法”と呼びます

上から順番にじゃないと使えない仕組み

1の型

覇気で相手の細胞を壊す技。十年ぐらいすれば治るけど下手に頭に当てると一発で知能障害

2の型

相手の血の流れを読み、体内の流れをおかしくする場所を見つける。
治すときにも使える

3の型

第六感を研ぎ澄ませ、相手の目的や行動などがなんとなくわかる

4の型

体内に気を飽満状態までに満たして、相手の攻撃を通らないようにする。

鉄塊と違うのは気が続く限りしか使えない+動ける

5の型

ロギア用の防御技、静かな心で自然と一体化してある程度ダメージをこまかせる。

逆に氷の技に自分は炎だと自己暗示をかけて極端に体温を上げて防御するという使い方もあり

6の型

気迫を仏のように神々しくを出せる（覇気に近い物、本能ではなく理性の方を揺さぶる）

思わず見とれる、思わず膝まつくなどの効果を期待できます

7の型

1の型の発展形。一撃必殺、当てた部分の細胞全部貫通？破壊。
胃らへんに掌打すると掌打した部分の細胞は全部壊れて胃がは足らなくなるなど

8の型

すべてに存在する自然エネルギーを体内に吸収してドーピング
元氣玉も出せるよ！

狩人の話（前書き）

カルザックさんがインテリだった。俺も知らなかった

狩人の話

- - - - - 小屋にて - - - - -

「それで、お前の視点での事情を説明してみる」

小屋に入り、一言目からそれだった。こういう時は死体を見せたりしたので心配するとかの言葉とかだろ。まあおやじの仕事や狩りで免疫はついてるけど…

とりあえず、その日朝早目に起きたから海辺まで走ったこと、そして宝箱があつたこと、

中を開けたら紙と悪魔の実が入ってたこと、数人の男達が追いかけてきて

逃げていたらたまたまこの小屋にたどり着いたことを説明した。

「とりあえずその紙とやらを見せてみる」

「はい、これ」

渡すと、カルザックはそれを読み始める。読んでいる間、この実を食べようかななどと考えていた。緑色の果物の表面には草が生えていて、もう一つの実軽い黒色で、こちらは毛？のような物が表面に生えていた。そこでふと気づく

「カルザックさん、外の死体どうすんの？」

ちなみに家族以外は基本さん付けだからな

「ん？ああ、あれはあとで遠目に捨てとけば大丈夫だろ、獣が片付けてくれるさ。」

それにしても…この紙の言葉を信じればこの黒い奴は食べた瞬間獣型になってしまうものらしいな、あともう一つの方は植物という”生命”を作るものだ。

俺が昔立てた悪魔の実は生命と水系統は関係できない説を覆されてびっくりしてるよ。

あと予想だが獣型になる方はクモになると思うんだが、基本こういう実は動物をモデルにしてるはずなのにこれは虫だ。

…極めつけにこの実は悪魔の実には見えない」

「おいカルザックさん、もっと簡単に説明してくれよ。せめて俺が分かる程度に」

「ああ、済まない。だがこの前まではの様子ならわかるはずなんだが…」

「わからん物は仕方ないだろ、早く早く」

「まず、悪魔の実というのはこういう形をしてるんだ」

そう言っただけで本棚から本を取り出して開いて見せてくれた。ふむ、題名は「悪魔の実の図鑑」か

「うわ、全部変な模様が付いてる」

「そうだ、ただお前の持つてる実はどちらも模様が付いていない。そして

悪魔の実には大きく分けて

人外の力を与えてくれる超人系、動物のような姿になる代わりに強大な力を与えてくれる動物系、自然現象の力を与えてくれるロギア系の三つに分かれている。そのなかでその黒い方の実の能力はおそらく動物系だ。

しかし、俺は獣系を食った奴を知ってな、そいつは食った瞬間変わるようなことはなかった。そいつの物がおかしいという可能性もあるが、これは悪魔の実とは違う物かもしれないからその可能性は

低いだろう。」

「それで？」

「要するに、食って生きないり獣型になるのはオカシイってこと。さらに言えば形からして悪魔の実じゃないから悪魔の実じゃない可能性が高い」

「へー。あれ？ええええええええ？！」

その時俺の顎が外れかけた

「それに書いてある所がピンポイントすぎるしもしかするとお前当てる可能性も捨てきれないわけなんだが」

「い、いわれてみれば……！」

「で、どうするんだ。もつと詳しいことは親父さんに説明しとくが食うか食わないかの最終判断はお前次第だぞ」

俺はそう言われてさっきの考えていた事を答えた

「俺は、俺はこの実を食いたい！」

そう言うとかルザックはどこかおもしろがってるように感じられた。でも、それを気にせず理由を述べはじめ

「俺はから海に出たかったんだ。理由は忘れたけど、体を鍛え始めたのもそのせいだ。でも、今は大航海時代、海賊の時代だ。だからどうせ出てもすぐにやられるだろうって諦めていたけど、悪魔の実さえあれば、俺でも海に出れるんじゃないかって思うんだ！」

「ほう、面白い。そこまで言うてのけるんなら俺も止めないさ。だが、まずオヤジに報告してからだ」

「わかりました、では今から行きましょう。カルザックさん」

理由を言い終えて、少し冷静になった俺は、顔が熱くなるのを感じながら小屋をでた。が、死体を見て一気に心が冷えた。忘れてた……

「カルザックさん、この死体……どうにかしません？」

「わかつてる」

セルリックの家

「ただいまー、親父！ちょっと話あるけど暇かー？」

「おうどうした、今なら患者いないから……ってカルザックじゃねーか、珍しいな、お前から来るなんて」

「よう、ジャック。ちよつとお前のガキのことについて話があつてな」

「なんだ、もしかして弟子にするのか？俺は構わないぞ」

「え？そっなの？！」

「セルが望めば断りはしないが今回は別の用件だ。セル、とりあえずお前の知ってることを話せ」

「わかつたよ」

体の鍛え方を教えてくれたし、もしかして頼んでれば狩りで使ってた技教えてくれるのかな。まあそれは後だ

そこまで考えると俺はカルザックに言ったことと同じことを親父に話し、その実を食べると決意した事も話す。その後、おやじはしば

らく考え込んだ後

「好きなようにせい、お前の人生はお前のもんだ」

「ありがとうオヤジ！俺は人生で初めてオヤジを尊敬したぜ！」

「よせやい、照れるわ。あれ、最初？」

やべ、さり気無く言ったのに気づかれた。そう思ってたらカルザックが軽く笑いながらフォローしてくれた

「そんなことより俺も気になることが幾つかあるから付き合え」

「おう、わかった」

「なあカルザックさん、他に話すことがあるのか？」

「ああ、たくさんな。特に異質の悪魔の実とはいえ、同時に2つも手に入るとなるとな」

「ふーん」

どうせ難しい話だから妹のところにも行くか。そう考え、俺は妹の部屋に行って話が終わるまで時間を潰した。

狩人の話（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください

感想や批判、アドバイスもお待ちしております

次は実を食べて能力試してたら試練が待ちうわなにをすら（ry

悪魔の実を食すとき

妹に外の話とかをしていたらどうやらオヤジたちが話を終えたようだ

「おいバカ息子、話は聞いたからその特殊な悪魔の実とやらをもつてこい。」

「えーなんでだよーあと糞親父」

「お前毎日走ってるからこれぐらい軽いだろ、早く行ってこい。」

「へいへい、じゃあお兄ちゃんちよっくらいつてくるわ」

「行つてらっしゃい、お兄様」

いやいやながらも、俺は小屋に向かって走りだした

――――――10分後――――――

「やべ、鍵持つてねーぞ、どうしよう……どっか開いてないかなあ。お、窓あいてんじゃない、不注意だな」

などと独り言をブツブツ言いながら入るセルリック

「悪魔の実……とあったあった。ついでに手紙も持っていくか」
必要なものを持ち、また走り始める

――――――村――――――

「ジャック、結構の数が来てないか？」

「お、言われてみれば」

「ちょっと見てくるか」

「おう」

二人は結論を出すと、村の外に出る。

「おいおいなんだあいつらぞろぞろと」

「気をつけなジャック、あいつら全員剣もってるぞ」

「言われなくてもわかってるわ！とすると海賊か？」

「可能性は高いな。まあ東の海だから多少鈍ってても余裕だろ？」

「だな、じゃあ競争とでも洒落込みますか」

「歩法が使えないんだけどな」

「いいハンデじゃねえか」

「チッわかったよ」

そこまで言うと、ジャックは駆け出し、カルザックは早足で歩き出した。

「おい、あの2人のおっさんなんかこっちに來てるぜ？」

「武器も持ってねーでやんの。とりあえず見せしめにあいつら殺してから食べ物とか差し出させようぜ」

「いやいや、それだけじゃ生ぬるい。セイメンの片手をとったんだ、殺さないで村人の前でいたぶってやらないと気がすまねえ」

「何でもいいから早く行こうぜ、俺もう下がたぎってきてんだよ」

「ギャハハハ、ついでにおみやげの女も何人が連れていきますかね。」

「いいね、クク」

「チェリオおおおお」

「ブハア」

略奪に思いを馳せていた海賊に不意打ち気味におっさんの飛び蹴りが炸裂し、数人が吹っ飛び気絶。

「おい卑怯だぞ！人がいい気分浸ってる時に！さっさとやっちゃま
グフ」

「リーダー格撃破ー」

体制を整えたおっさんはすぐさま偉そうに命令してた海賊の鳩尾にパンチを入れる

その後が続いてカルザックが追いつき、落ちていた剣を拾う。

「何がハンデだ、出来てるではないかつ」

一人の剣が折られ、首を切り落とされるが、剣には血も油もあまり付いていない。

「うるせー、最低限武器を使える程度の相手にまだ倒しきれない自分の衰えっぷりに驚いてるくらいだつ」

一人の体に手のひらを当て、力を込めたように見えた直後、男の後

ろにいた一人が吹っ飛ぶ。手のひらを当てられている奴の顔は驚愕に満ちている

「相変わらず使いかってがいいのか悪いのかわかりにくい技使いやがって」

突然しゃがみ、後ろからの攻撃を避け、剣を持ちながら一回転。

「あ、あしがああああ」

周りにいた人の膝が碎ける

「お前こそ容赦のない対多数戦法は変わらないっておい逃げんな」

「うわあああばけもんだああああ」

残った奴らは10人程度、さりげなくリーダー格の奴を担いでるところを見ると慕われてはいるようだ。

「「逃がすかよ」」

もちろん二人は追撃をする。ジャックはカルザックに手のひらを当て、先ほどの衝撃波を打ち込んで行き、カルザックは落ちてる武器を片っ端から投げつけていく。

それでまた2人ほど気絶し、一人が怪我、一人が運悪く武器が頭に刺さり死亡。

調子にのってきた二人、さらに顔を青くする海賊。しかし運悪く逃げてる先に遊んでる子供達がいた。海賊は活路を見出したかのように顔をほころばせる。石を投げたりして走れないよう牽制しつつ追いかけていた二人は顔をしかめる。

海賊は子供たちに突っ込む。子ども達は蜘蛛の子を散らすように逃げるが、一人が転び、捕まる。海賊はすかさず剣を突きつけ、言う「おい！このガキの命を欲しけりや俺たちを逃がせ！」

$\mathbb{Z}_0$

（あともう少しかな）

そう思って少し速度を緩める。しかし、突然音がやんだ。

（なんだ？）

みえてくるとともに理由がわかる。

（なんて奴らだ、人質とつてやがる）

（そうだ！悪魔の実なら……）

そう思ったセルリックはすぐに緑色の方をかじり始める。

新鮮な土とアンモニアとその他異臭がする草の味に少し涙目になりつつも、草のボール状の物……もとい悪魔の実（仮）を飲み込む。

（たしかあの紙にはイメージが大事で植物がどうのこうのって書いてあったよな…）

そう思い、手からツタが生えるのをイメージする。すると、てからツタが生えてくる

（できた！）

何故かそのツタはまるで体の一部のように動かせるようだ。1分ほど練習すると、ある程度使えるようになった。

(じゃあ横に回りこんで…と)

ツタで人質をとつてゐる男の顔を痛打する

（行ける！）

調子にノリ、ひたすら男達を殴っていく。しかし、男達はいいに剣を抜き、ツタをたたき切った

「いってええええええええええ！」

腕を切られたことはないが、まるで体の一部を切られたような痛みが走る。

「このクソガキかあああ！」

セルリックに気づいた海賊たちは逆上し、襲いかかろうとするが。

ビチュン

バン

ベチャ

ジャックが石に覇気を込め、おもいきり投げたのだ。ただの武器を持った人間でしかない彼らの頭はトマトが爆発したような状態になり、倒れた。

幸い、セルリックはツタを切られた痛みでそれどころじゃなかった。ジャックはそれらに背を向け、セルリックから見えない場所に立つと、焦ったように聞く

「どうしたんだ！セル！セル！」

腕を亡くしたような痛さに思わず気絶してしまうセルリックだった。

悪魔の実を食すとき（後書き）

石に覇気を込めるのは多分できないと思うんですが、そこはオリジナル要素として。あとジャックが特殊なだけ

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

義妹の悪魔の実と修行の始まり（前書き）

新しいキャラ思いついたけどワンピースとか東方とかでは遊べそうにないからネギまはどうだろうとか考えてたら結構時間たった

義妹の悪魔の実と修行の始まり

「う、うん…」

「お兄様？！お父様！お母様！カルザック様！お兄様がお目覚めになりましたよ！誰かいませんかー！」

ドタドタドタ

「ああ！私の可愛いセル坊や！大丈夫でしたか？」

「オカン、この年で坊やは恥ずかしいって」

「ああ、いけませんね、つい地が出てしまいましたわ、フフ。それよりなんですか？このつたは」

「えーと、その、悪魔の実で…オヤジからなんか聞いてない？」

「あなたが昔から体を鍛えていたのは海に出たかったのではと思ってましたがまさか悪魔の実にてをだしていたなんて…それよりあいつなんで私に教えなかったのかしらブツブツ」

（オヤジわりい、へまった）

「お兄様、悪魔の実ってあの悪名高き悪魔の実でございしますか？」

「悪名高きってたかが水に触れると力が抜けるだけじゃん」

「いいえ、お兄様はそれを軽視すぎです。今は大航海時代、大きな陸は少なくしたいが島、故に船が重視されるというのにその海に嫌われてしまっただけのデメリットです」

「で、でもなかなかいい能力だよ？植物を生やしたりできたり多分種も作れるし」

「それについてはあとでもっと詳しく聞くとしまして、そもそも悪魔の実というのは図鑑で書かれた名前で予想付きますが大博打なんですよ？」

（サヤの説教は長いんだけど俺を思ってくれて行ってくれてるんだよな やっぱりうれしいな）

「どうしたんですか？お兄様、ニヤニヤして。」

「え、あ「おお！セルリック！起きたのか！大丈夫か」」

（おやじナイスタイミング！流石に面と向かって言ったら恥ずかしいし）

「あなた、少しおはなしがあるんですが」

「え」

入ってきて速攻で怒りマークの付いた奥さんに捕まるジャック。ジャックはセルリックにアイコンタクトを求める

（ごめんなさい）

としか帰って来ない

（セルうつつうつつう！セルが起きてから言おうと思ったのが裏目

にでちまったあああああああ

「ジャック、お前の代わりに説明しよう」

「まって、カル、親友だろ？助けてくれるだろ」
目をそらすカルザック

「カルウウウウウウ」

「さああなた行きますよ」

誰かの悲鳴が聞こえる。空耳かな

「さて、まずお前の気絶した理由を教えてください」

「確か、腕が切られたような痛みがして気絶した気がする」

「大丈夫なんですか、お兄様」

「ああ、もう大丈夫」

そこで、カルザックはセルリックから生えたツタを触る
「なんか感じるか？」

「うん、なんだか触られてる感じ」

「そうか…じゃあこれを戻す、もしくは消すことが出来るか？」

「わかんないけどやってみる」

（ツタが生えるイメージで出てきたからもどるイメージで…）
すると、ツタがするすると体の中に埋まっていき、完全に埋まる。

そこにはまるで最初から

何もなかったかのように跡が全くない

「よかった。一度生やしたら戻せないと切り落とすのを考えないといけなかったからな」

「な」なぜですか？カルザックさん、お兄様はこのツタを切られた痛みで気絶したと

言ってます。なのになぜまた切り落とす必要性があるんですか？」
そ、そうだ」

「ふむ、こういう話を知っているかい？ある日ある子供が悪魔の実を偶然そうと知らず食べてしまった。そうするとまあ不思議、その子供は全身楽器になる楽器人間になつてしまいました」

「それがどうしたんだ？」

「まあまあまだ続きがあるから聞いといてくれよ。その子供は最初は驚いていましたが、

喜んで特訓してついには曲を完成させました。そして子供は得意げな顔で村のみんなを集めて

披露しました。最初はみんなすごいすごいともてはやしましたが、

次第にその子供をのけ者に

し始めました。なぜならみんな気味が悪かったのです、その子供は化物だと言われ、

拳句に奴隷商人に売られました。ちなみにこれ本当の話な、ある地方には奴隷制度が許されて

いて俺らが海賊だった頃にその楽器人間をオークションで落としたんだよ。」

「そんな…ひどい…どうしてそんなことが」

「悪魔の实の存在を知らなかったのさ、だから化物だと思って排除する。ちなみに俺とジャック、お前らの母さんは元海賊、もちろん悪魔の实を知っている。だからこつという反応ができるのであつて村人までそうではないと考えるのが妥当さ」

「だからって…」

「大丈夫だよサヤ、もともと俺は海に出る気だつたんだ、ちょうどいいさ。」

「時にセルリック、お前はどうして海に出たいんだ」

「ゴールドロジャーは世界を一周したんだろ？だから俺もそれをしていたい」

「だがそれはただのお伽話じゃないかな」

「だからさ！だから俺が実際に世界一周して世界にそれを知らせるんだ！」

「お兄様かつこいいです」

サヤは少し顔を赤くしてセルリックを見てる。なんだか恋する乙女のような顔に見えるが兄妹だからそれはないだろう。とかふとカルザックが考えたのは余談である

「ふむ、そうになると最低限グランドラインに入る必要があるな。どうだ、俺とジャックの技」

を教えてやろうじゃないか。極めればグランドラインでも通用するぞ」

「本当か！お願いしますカルザックおじさん！いや、師匠！」

「師匠か、俺のしごきはきついぞ。なんせすでに一人断念した奴がいるからな」

「ええ！他にもいたんだ」

「ああ、確かそいつの名前はクロといったかな。将来会う事になったら仲良くやれよ」

「クロか、覚えておこうかな」

「じゃあ修行は明日からだ。ジャックの方は俺が話を付けとく」

「ありがとう！師匠！」

「がんばってくださいまし、お兄様」

「おう！」

義妹の悪魔の実と修行の始まり（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください

感想や批判、アドバイスもお待ちしております

次は修行の内容とか必要なことを書いてたら金栗叩きつけようか迷っています。

修行のおはなし

修行を始めると言われた次の日、カルザックにまずはどういう物かを知った上でやり方を見て覚えろって言われた。

2つ技を合わせてひとつの技にするらしいんだけど、昔の弟子は普通に走っても足が途轍もなく早いから片方を覚えてもう片方を教えようとした前にだ逃げ出したかららしい。

「いいか、俺がお前に教えるのは抜け足と差し足だ、これらを合わせて忍び足と呼ばれる」

「はい師匠、質問です。抜け足と差し足の違いってなんですか」

「抜き足はとにかくスピードを上げる技だ、ある領域まで行くと早すぎて周りからは消えたように見える。ただし自分も追いつけなくなるなんて事になる。そして差し足がそのスピードを調整する事ができる完全な無音走法だ。あとはうまく殺気とかを隠せば最高の暗殺術になる」

「消えたと思ったら死んでいた？」

「それだよセルリックくん」

「ほえー」

「だから今からゆっくりやり方だけ教えるよ」

そう言っつて、カルザックは歩くのと同じぐらいのスピードで足を動かしていく

「うーん、いまいち完成形が想像できないなあ。実際にやってくれ

ないですか」

「悪いけどそれはできないんだ。俺は昔海賊だった事は話したよな」

「はい。あつ」

「気づいたみたいだね、昔小競り合いの流れ弾で足の神経をやってしまつてね」

「大丈夫なんですか？」

「その時ジャック…君の親父さんに世話になつたよ。ただ俺をだしにして海賊団抜けたのはいただけがないがな」

「そうだったんですか」

「とにかくお前の基礎、あいつ風に言えば功夫クシフか。それはすでになかなかの物だからこの型を覚えろ。

いいか、どれが抜け足でどれが差し足だなんてどうでもいい。バランス悪く片方だけ極めかねないからな。最初から忍び足を目指せ」

「わかりました」

「ちなみに午後はお前のおやじさんがお前にあいつの技を教えたいつていつてたぞ。どうせ攻撃力をその悪魔の実でカバーするぐらいならあいつの技を覚えておいた方が絶対いいぞ」

「そうなんですか？」

「ああ、あいつの隔人拳衝の威力はお前も見ただろ。それ以外にも

如来神掌って拳法も持っているから覚えておいて損はない。ていうか覚えたほうが絶対いい」

「隔人拳衝なんて俺見たことねー…です」

「昨日お前は俺たちを追いかけてきたじゃないか、あの時クレーターあつただろ？」

「クレーター…ええ！もしかして」

「そうだ。あいつは武装色の覇気を人を介して撃ち出す事ができる技を持ってるんだ。しかも如来神掌が使えるから自然系（ロギア系）ともいい勝負できるな。たしか如来神掌の伝本が家宝とか言ってたな」

「へえ、初めて知った」

「まあがんばれよ。お前まだ9歳にもなっていないんだろ、17ぐらいにはギリギリ合格ラインぐらいならいけるさ」

「えーと…7年やってまだ最低限ですかよー」

「8年だお馬鹿、真に完成させるのはやっぱり実践しかない。第一訓練だけで強くなっても生き残れるわけがない。まあでも東の海でイーストブルー通用するぐらいなら14で行けるだろ。」

「東の海は5年で最低限？」
イーストブルー

「今度は合ってたね、答えは×。5年で上の中以上だ」

「うそだ！いくらなんでも弱すぎるよ！」

「上の中でもグランド行けば平均行けるかどうかさ。たまにそれこそ化物としか言い用のないグランドラインの奴らが遊びに来るから上の中であって実質最強じゃないか？覇氣と忍び足だけで。」

「えー、じゃあお父さんから教えてもらう必要ないじゃん」

「お前は世界一周が夢なんだろう？だとしたら覚えた上でそれを極めないとほば無理だ。どうせ他の海賊か海軍に食われるだけだ。まあ東の海イーストブルーみたいなぬるま湯に忍び足に反応できる奴なんてたぶんさっき言ったグランドラインから遊びに来るような化物だけだ。」

「は、はは」

「ちょっと話すぎだな、とりあえず型が出来るようになったら普段から忍び足を使え。今のうちに慣れておけば調整も楽だ」

「わかった」

そしてKing Crimson・・・・・・・・・・14歳ぐらいまで飛ばされる

修行のおはなし（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

海賊が来たぞー！（前書き）

1の型については”キャラ設定など”を御覧ください、正直本家如意神掌わからないので適当に効果決めました

海賊が来たぞー！

14歳までの過程が飛ばされ！セルリックは走るスピード400メートル40秒切った！

要は一息で100メートル10秒のペースで走れるって事です。忍び足を使えば…フフフ

セルリックが14歳になった頃、事件が起きた。
海賊が来たのだ

「おらぁ！俺は賞金5000万ベリー、”銃器”のジャギ様だぞお
おおおおお！」

「どうしたぁ！お前らビビってんのか！ならちようどいいな」
最後にぼそつと言う

「おいてめえら！村じゅうの食べ物飲み物女そして金！全部集めて
こい！」

「……はいつさー」「」

そう返して船員たちは散らばろうとするが
「ばふぁぁ！」

「……せんつちよー！」「」
いきなり船長らしき者の腹に手のひらの跡が付いたと思ったら、倒れた

そして船員たちも、その言葉を最後に倒れる

- - - - - 数分前 - - - - -

家の中に

「おい、バカ息子、忍び足如来神掌はもう覚えてるよな」

「当たり前よお、糞親父。最初あんなヨレヨレの本渡されてびつくりしたなあ。だけど如来神掌の威力がまだいまいちでさあ」

「たりメエよ、お前は誰と組み手してると思ってんだ。俺とカルだぞ、あんな雑魚と一緒にすんじゃねえ。あとヨレヨレなのは認めるから大事にしるよ、あと誰にも渡すな」

「おいてめえら！村じゅうの食べ物飲み物女そして金！全部集めてこい！」

「あいあい、わかってるさ。そんじゃあ最弱の海の手、どれ弱いか見せてもらおう」

「「「はいつさ」「」」

そう言うと、忍び足で船長はい人の前に行き1の型をぶち込む

「ぶふああ！」

うーん、予想以上に手応えがあるぞ。なんでこんなのも5000万もするんだろ。木に打った時に芯の半分ぐらいまで腐った時の手応えに似てるな。内臓傷ついてるかも。さすがにここ

まで弱いと思わなかったし…普通にデコピンでいけるかな？

最初の三人はデコピンで倒し

デコピンの攻撃遅すぎ！手をグーにしておなかーにラリアットウー！

あとの奴らは全員超速ラリアットで腹にモロに食らって下呂吐いた
り血を吐いたりして倒れる

「ふうー終わった終わった。でも5000万ベリーの割には雑魚だ
なあ」

「終わったか馬鹿息子、多分そいつ5000万のやつじゃないぞ」

「えっ、うそ！」

「確かこの前見た50万ベリーの”はったり”サイマルジとか言う
やつだった気がするぞ」

「なんだよそれー50万ベリーとか弱くて当然じゃん」

「いやいや、50万ベリーでも一般人には危ない存在だから。とり
あえずこいつ倒したのはお前だからお前が換金してこい」

「えーやだよー」

「十分の一はお前にやる」

「えーと暗くなる前に帰るぜ、あばよ」
5万ベリーはでかい

「帰る前に海軍の基地から”六式”に関係する書類が本盗んでこい」
走りだそうとしたらそう聞こえた

「え」

「おーどうしたバカ息子、まさかできないなんていうんじゃないだろうな。そもそも忍び足は暗殺歩法だぞ、

忍び足を使えるんだから盗むぐらいできて当然だよな。大丈夫だ、バレなければ大丈夫だしバレても懸賞金50ベリーぐらいだよ」

「わーたわかった、行けばいいんだろ行けば…」

退路を全部絶たれ、諦めて換金しに行くセルリックだった

海賊が来たぞー！（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

賞金首強盗多いね（前書き）

今回は主人公視点

賞金首強盗多いね

とりあえず海軍支部がある街まで走って来たけど

「おいそのガキ、誰か急患か…ってそいつ賞金首じゃねーか！」

「なんだって？寄越せ！」

寄越せとか言ってくるチンピラにしか見えない奴らが続出。全員蹴っただけで吹っ飛んだ

しばらくすると周りの人が俺を避け始めた。なんなんだ貴様ら

軽く頭に怒りマークをだしながら本部に行き、受付に聞く

「賞金首の換金所はどこですか？」

「となりの収容所でできますよ」

そしたら近くにいた海軍のおっさんが話しかけてきた

「おう、何だ坊主、賞金首倒したのか？ふーん、そいつは確か50万ベリーか。50万ベリーなんて大金ガキが持つもんじゃねえぞ、痛い目合うからな。カラカラカラ」

ウゼエ…

俺は無視して換金所に行き、換金する。

「お、生きてるね。はいよ、50万ベリーぴったり。確かめな」

「あい」

ちゃんと50万ベリあるな。あとは潜入して六式の本を盗むだけか。

そう考えながら、出ると。

「おい坊や、痛い目会いたくなければ金寄越しな」

ニヤニヤ笑ってるさっきのウゼエ海軍の奴とチンピラっぽい奴らがいた。ちょうど人多めだし隔人衝拳の練習にでも使ってやるかね

「やだね」

ニヤリと笑ってそう言つと、忍び足でうざい海軍の懷に飛び込み、おもいつきり撃つ。

「お？ なかなかいいパンチに見えたが全然きかねえぞ、やっぱガキはガキだな。なあお前ら」

海軍の人は笑って後ろを向くと、チンピラがダメージを受けてた。

「「「は？」「」「」

「うーん、一人かー。イマイチ」

「こいつ、能力者か！」

なんか言ってるけど無視無視

ドル袋を地面に置き、ラッシュを入れていく

「う、うおおおおお」

ドドドドドという大層な音の割には全くダメージを受けてない筈だから、やられてる本人は恐れおののき、後ろのチンピラどもは

「うわあああああ」

次々と倒れていく仲間を見て逃げて行つた。

「フン、もう逃げたのか。まあいいや、バイビークソ海軍」

鼻で笑うと、海軍の人は顔を青から赤へ変え、剣を抜こうとしたところで1の型をぶち込む

「ぐあ…」

なんか口がふぐみみたいに膨らんでるぞ

「ぶはあ」

うわ、血い吐いた。キタねえ。俺？俺はドル袋持って避けたよ

よく考えたら海軍殺つたらやばくね？俺はすぐにそのことに思い至る。

六式盗んだら速攻で逃げるか。

俺は本部ぽい所に忍び足で忍び込んだ

King Crimson

1、2時間後

くっそーなにが六式だよ、どこにもないじゃんか

そう思いながら支部から出る。

それにしても本当に気付かれなかったな、一番まともな反応でも”なんだ、風か”だし。

ん？そういえば海軍の船はまだ見てないな、あそこにもなかったら
おやじに文句言お

意気揚々と乗り込んだ船の船首は、骨を啜えた犬だった

賞金首強盗多いね（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

東の海の家軍の癪に…

入り込んで船の番人がいきなり

「む、何やつ！」

気づきやがった

まあここで止まってごちゃごちゃ言うのは間違えなく返り討ちフラグと

俺のセンサーが言ってるのでスルーして逃げる。ところでフラグって何だ？

「く…気のせいかな。東の海でいるわけじゃないよな…」

そして船の番人の人の独り言が聞こえた、

セーフ！セーフ！あぶねええええ！逃げて正解だったあああああ！マジビビったあああああ

よし、最初はこの部屋だな

入るとキツチンだった。

「腹減ったしちよつとパクっても大丈夫だろ」

冷蔵庫からマンガ肉を取り出してムシヤムシヤ、酒っぱいのをゴクゴク…ゲフゲフ、まっず。

ジューズないか「やっぱり誰か入ってきてやがったな！」なあ

セルリックがあ、忍び足でえ、懐にい、飛び込んでえ、掌打をぶち込み気絶させえ

うわああああああ

ハアハアハア、なんで気づいたんだしなんでだし、早く見つけないと、とりあえずこの部屋だな

入ると栗の花のにおいがツーンと

「うへえ」

嫌々ながら入って見るとベッドの隣に筆記用具とノートが置いてあった。

書いてあるのは…”六式考察”。！！！！キタコレ

そう思つてすぐにそれを開いてみると、卑猥な写真が挟んであった。たしかに六式の絵とか

描かれててやり方とか詳しく書いてあるけど…何故かカピカピで臭い写真が…

俺は迷わずそれを投げ捨て、ノートをドル袋に突っ込み、逃げ出した。

部屋をでると

「おい！だいじょうぶか！おい！」

意識がないことを確認してカタツムリみたいな物を取り出してしゃべりだす

「クソ、大佐！こちらガイラング、船番をしていたクルーシが襲撃された、

腹には比較的小さの掌の跡があり、相手は比較的小柄の者が考えられます！」

『了解、すぐに増援を向かわせる』

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。どうする、やっぱあいつも反応するよな、どうする？

不意打ちで掌打打ち込むか、むしろ大サービスで1の型を膝らへんに打って逃げるか

よし、膝狙って動けなくなった所で逃げよう

俺は忍び足で近づき、おもいつきりーの型を打ち込もうとしたら

「一閃」

手のひらを切られた

「ぐうううう」

思わず手を抑えそうになる

「ふん、相手が悪かったな、最初から隠れていることには気づいていた… なっ、子供?!」

その隙を突き、

「子供で悪かった、なっ」

出口を狙って全速力で走る。力加減なしでだ

「な、クソッ能力者か!」

ハア、ハア、ハア

あー疲れた。東の海って最弱だよな? 現に俺から賞金首奪おうとした奴だって雑魚じゃねーか

クソ、おやじのやつ何が”気づかれない”だ! おもいつきり気づか

れてる上に切られて…

切られて？

よくみると手は緑色に変色し、緑色の細い線のような物で繋がっている。さらに観察してみると

心なしかちよつとづつ手がくつついて行ってるようだ。

見てて頭がゆくなってきた。

ここでやつと思い出す。自分は植物の能力者だと

「ハ、ハハ」

思わず声が出た

周りの人が訝しげにこちらを見たが気にしない

そして俺の手を見て顔が青ざめたように見えたが気にしない…

「きゃー！この子の手真つ緑！」

俺はハツと親から言われたことを思い出す。

能力者は周りから化物呼ばわりされ、力がない子は迫害されて殺される。

力があつたらあつたで周りはどこことなく自分を恐れる。そういう話をそしてすぐに忍び足で走りだす。

誰にもぶつからないように、気付かれないように、気配を殺して、ひたすら自分の家まで

途中で犬の被り物したおっさんが

「ぬ」

とか言つてつかもつとしてきたように見えただけの体制を低くして回避して、ひたすら走る

「むう、あの感覚、前にもあった気がするのう…」

喉が渴く、いつもならこの程度で喉は乾かないがとにかく喉が渴く。ドル袋を家の玄関に放り投げ、井戸に行き、水を飲む

「おお、バカ息子、早かったなって何だその手は！」

「プハア、ん？」

自分の手を見て気づく

「ああ、能力だよ。すっかり忘れてたけど」

「ううむ、まるで植物みたいじゃないか。確かツタを生やす能力だっただろ」

「わかんないけどすごいのが渴く。でも何だかすごく力がみなぎる。」

「たしかに気は今までで一番だな、しかしお前息しなくても大丈夫なのか？しかも汗だくだし」

「あ、たしかに」

言われてみれば体中濡れてる、しかも息してなかった

「むう、植物、植物かあ、うん、光合成に似てるな」

「光合成？」

「おおよ、確か昔見た書物で植物は日の光と水でエネルギーをエネルギーに変える代わりに」

空気と水蒸気とかを生むって書いてあった。今のお前に当てはめればそっくりだろ」

「なるほど」

「つまりお前は植物人間ってことか！ガハハ」

「笑うなよお。それよりおやじ、海軍の奴ら俺に反応したぞ、それにこの手だってその海軍の奴らに切られたし」

「なんだと！そんなにレベルが上がってたのか！いや、それはないな…」

「そういえば船首はなんだった」

「犬」

「いぬう？！やはりあの噂は本当だったのか」

「なんだよ噂って」

「いやな、グランドラインの少将が最近東の海に遊びに来るって噂があつてな」

「その”少将”ってのはどれくらい強いんだ？」

「そりゃあ海軍の階級の4番目だからな。とてつもなく強い」

「4番？！俺よく生きて帰れたな」

「まあそんな奴の船に乗り込んでその程度ですんでラッキーだったな」

「そうだな…」

東の海の家軍の癪に…（後書き）

誤字脱字、変なところがあれば、ご指摘ください
感想や批判、アドバイスもお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317q/>

ONE PIECE 手違いの転生者

2011年3月27日09時06分発行